海とともに生きる
～神々の海から恩恵を受けて～

大社町漁業協同組合
大社町水産研究協議会　斎藤彰

1. 地域と漁業の概要

私の住む大社町は島根半島西部に位置し、出雲大社、日御碕灯台などの観光名所を有する。また、神無月で知られる１０月には全国各地から神々が出雲大社に集うため、この出雲地方では１０月を神在月と呼ぶ。

私が所属する大社町漁協は正組合員２３１名、准組合員４１３名で構成されている。当漁協の漁業はブリ等の一本釣を中心に定置網、底曳網、採貝藻漁業が営まれ、平成１１年の販売事業取扱高は１，０６３トン、６億３０００万円であった。

2. 協議会の組織と運営

大社町には御碕地区を始め４地区に水産研究会があり、町全体の組織として、大社町水産研究協議会がある。現在の会員数は９０名で、活動資金は年会費、町及び漁協からの助成金で賄っている。

3. 実践活動課題選定の動機

私は全国漁協学校を卒業後島根県漁連に就職したが、２年半が過ぎる頃一つ考えることがあった。県漁連は漁業者があっての団体だが、現在漁業者は高齢化し、新規就業者もほとんど０と言っても過言ではない。基盤がない上での団体はやがて無意味な存在となってしまいかねない。

そこで、私は自ら漁師となり、その基盤から支えていこうと決心した。幸い子供の頃から父と一緒に漁にでていたため、漁業に関して世間で言われるほどのきつい、汚い、危険という感覚はなかった。

また、同じ水産高校の出身である妻が、私が漁師になることに賛成してくれたことが何よりも大きな支えとなり、私が漁業の世界で生きていく励みになった。

就業当初は父親と同じ船で出漁していたため漁に関してさほど苦労はなかったが、４ヶ月後に２トンの漁船を購入し１人で出漁するようなると状況は一変した。

最も苦慮したのが漁場の探索で、出漁前に漁場のＧＰＳ数字を父親から教わっていたが、当時のＧＰＳには誤差が大きい上、潮流、風向など毎日変化する海況に悩まされ、釣り糸を垂れるまでにはかなりの時間を要した。その結果、近くの船がブリを２０～３０尾釣りあげているのに、私は漁獲０ということがよくあった。

現在では何とか一本釣漁業にも慣れ、年間収入のうち大きなウエイトを占める冬場のブリ釣を中心に周年操業している。

しかし、１０年、２０年後の漁村の未来像を考えると、決して明るいものではなく、我々

若い漁業者が一本釣漁業と地域の基幹産業を守り、漁村の活性を図っていくことが必要であり、率先してこれらに取り組んでいくこととした。

4. 実践活動状況及び成果

① 担い手育成対策について

現在、一本釣漁業者は高齢化が進み、このまま漁業者が減少した場合、一本釣漁業の崩壊だけでなく、漁村の存続すら危ぶまれる。

私のように親あるいは親戚等が漁業関係者であれば幾分就業が容易かもしれないが、親あるいは親戚等に全く漁業関係者がいない場合、一本釣漁業で生活の糧を得ることは非常に難しい。

このため、新規で一本釣漁業に就業するためには新規就業者のサポート体制の整備が必要と思われる。

具体的には図３のように新規就業者が師匠に弟子入りできるような行政、漁協、漁業者が一体となった支援制度の創出が必要であることを提案するとともに、折に触れて関係機関等へ要望していきたい。

また一方では、私たち協議会自らも担い手対策の一環として、小学生を対象に１泊２日で漁業体験学校を開催している。これは水産業に対する理解を深めてもらうとともに、将来何らかの形で水産業に携わる人が育ってくれればという思いで実施している。参加者の感想として「とても楽しかった。来年も参加したい」という子供の声や「今度は親子一緒に参加したい」といううれしい声も聞かれた。

② 漁業経営の安定化について

近年の魚価低迷により今までのようにとる漁業だけでは安定的な収入を得ることはできない。そこで、安定的な収入を得るために３つの改善策について取組を行っている。

１)栽培漁業と資源管理型漁業の振興

資源の枯渇により、栽培漁業などのつくり育てる漁業と共に、資源管理型漁業を積極的に推進することが必要である。

このため、当協議会では、マダイ、ヒラメ、アワビの中間育成・放流をはじめ、全国に先駆け平成８年からオニオコゼ、平成９年からキジハタについても取り組んでいる。その成果が認められ、社団法人日本栽培漁業協会が発行している『さいばい』に記載されたほか、ここ数年、他県より視察者が訪れるようになり、全国的に高い評価を得たと感じている。

また、マダイについては１５cm以下、ヒラメについては３０cm以下について再放流を実施している。さらにこのことを遊漁者にも周知徹底してもらうため、チラシの配布も行っている。

２)流通改善

これは昔から言われているが、地元市場出荷のみでは大漁時に値崩れが起きる。こういったことが起きないためには流通チャンネルの多様化を図るとともに、競争に勝ち抜くためには商品の信頼性を高め、ブランド化につなげる努力が必要となってくる。ブランド商品を作り上げるためには、高品質な商品作りが必要であり、現在、漁獲後、行われていない延髄〆、血抜きを協議会一丸となって実施するなど新たな取り組みが必要と思われる。

同時にブランド商品のＰＲ活動が必要となる。ＰＲ活動が不十分であると、どれだけ鮮

度保持や高品質に取り組んでも評価されない。

魚については現在全国名のブランド以外はあまり魚価に大差がない。それは魚を購入した消費者から生産者の顔が見えず、安心感が得られないからであると思う。大々的なＰＲ活動資金がない場合、私たちは一方的な宣伝をするのではなく、消費者と生産者がどのようにコミュニケーションをとるかが一番の要点と考える。私はブランド名とともに生産者の顔、名前、漁獲日を記入したシールを貼ることを提案し、実現に向かって取組を進めている。(図４)これにより少しでも私たちを知ってもらうことができ消費者に安心感を与え、「あの人の釣った魚はおいしかった」等リピーターを得やすい環境を作ることができると思う。

大社町漁協には漁協の直売所「海流館」がある。直売所では流通マージンが少なく生産者は漁協に魚を高く売ることができ、消費者は安く魚が手にはいるといった利点がある。また、生産者と消費者のコミュニケーションが取りやすいため、前述したような消費者に生産者の顔が見える商品を作り上げることができると思う。

３)マリンレジャーの振興

このまま漁獲量、単価が落ちていった場合、将来漁業だけでの生計は非常に苦しいものがある。この地域はスキューバーダイビングを行う人から非常に要望が強く、海中公園もあるといった非常に恵まれた地域だと思っている。個人で実施するのは難しいが、団体で行えば融通もきき、地域の雇用も拡大する。ひいては、観光客が漁村を訪れることにより閉鎖的な漁村風土も変えていけると考えている。

新しい取り組みとして昨年秋に地元の若者１９名が集まり、マリンレジャーサークルを結成した。活動内容はサーフィン、ジェットスキーなどマリンスポーツを通して交流を深めるとともに、活動内容を話し合う検討会を月１回のペースで開催している。検討会の中で地元活性化の一原動力として何かできないかと検討を行い、今後は海岸清掃、海にちなんだイベント等を開催したいと考えている。

この取り組みが直接マリンレジャーで収入を得ることにつながるとは思わないが、このことが少しでも刺激となり、若者だけでなく地域一丸となり、漁村に触れ合うマリンレジャーを作り上げたいと考えている。

5. 今後の課題

一本釣漁業は後継者不足、魚価低迷等により衰退の一途をたどっている。しかし、一本釣漁業は他の漁業種類と比較して、漁獲物を丁寧に扱え高品質、高価格さらにはブランド品になるのにふさわしい商品を作り上げることができる。さらに、大量に漁獲する必要がないため資源にやさしく、最後まで生き残れる理にかなった漁業種類の１つであると感じている。

一本釣漁業の存続には後継者育成確保対策が急務であり、実施が遅れれば漁村の崩壊にもつながりかねない。関係機関が協力し、一刻も早い支援施策等の実施が必要である。

一方で、一般レジャーの釣人口は年々増加傾向にあり、平成１０年の釣人口は3,326万人で、昭和５０年代当初の２倍に膨らみ、我が国の一大レジャーの一つとなった。

現在、多くの海域で漁業者と遊漁者は対立の関係にあり、漁場の利用をめぐっては裁判になった地域もある。しかし、両者とも同じ海面を利用し、同じ海から豊かな恩恵を受け

ており、互いに話し合いで海面利用のルールを作り、両者手を携えてこの海を守ることが必要である。

私の家は大社町で唯一、親子３代で漁師をしている。私自身このきれいな海に育まれ、遊びも海から学んだ。２人の子供の名前もこの大自然にちなみ、長女が「海に咲く」と書き（みさき）、長男が「海に輝く」と書き（かいき）と名付けた。

息子が大きくなってもこの海から豊かな恩恵を受け、ゆくゆくは漁業者と遊漁者の架け橋となるような職業（例えばスキューバーダイビングのインストラクター等）に就いてくれればと思っている。

最後に私をここまで育ててくれた海に感謝するとともに、これからも海とともに生きていきたい。

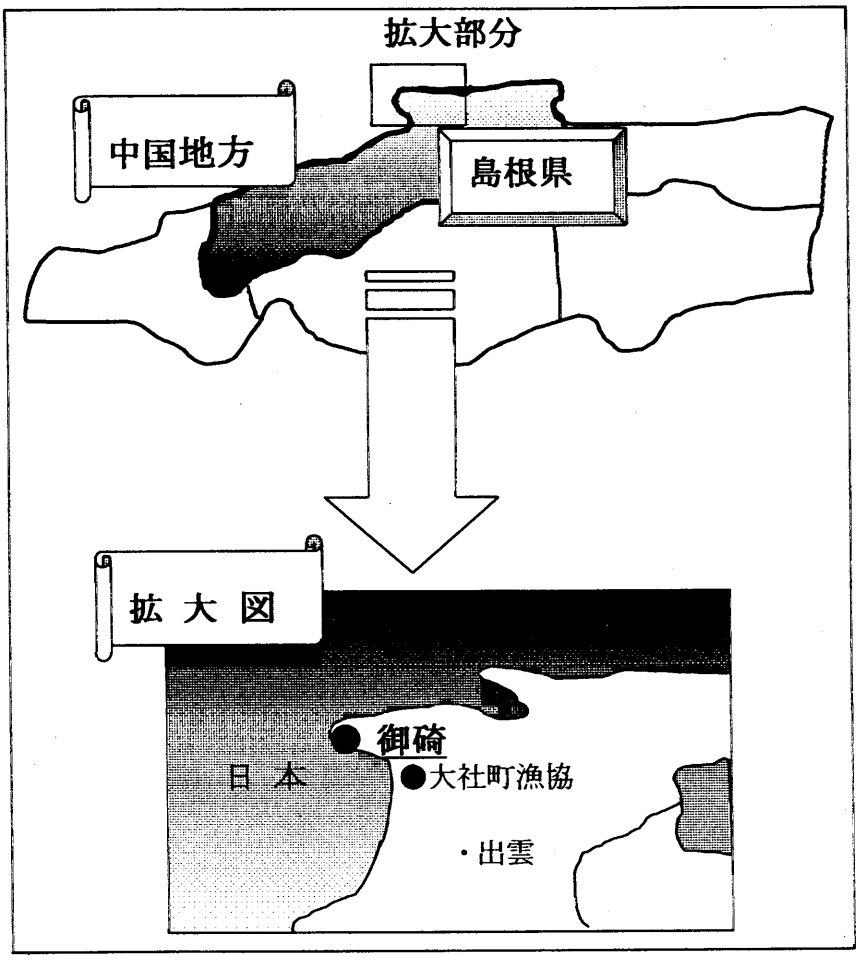


図１　位置図

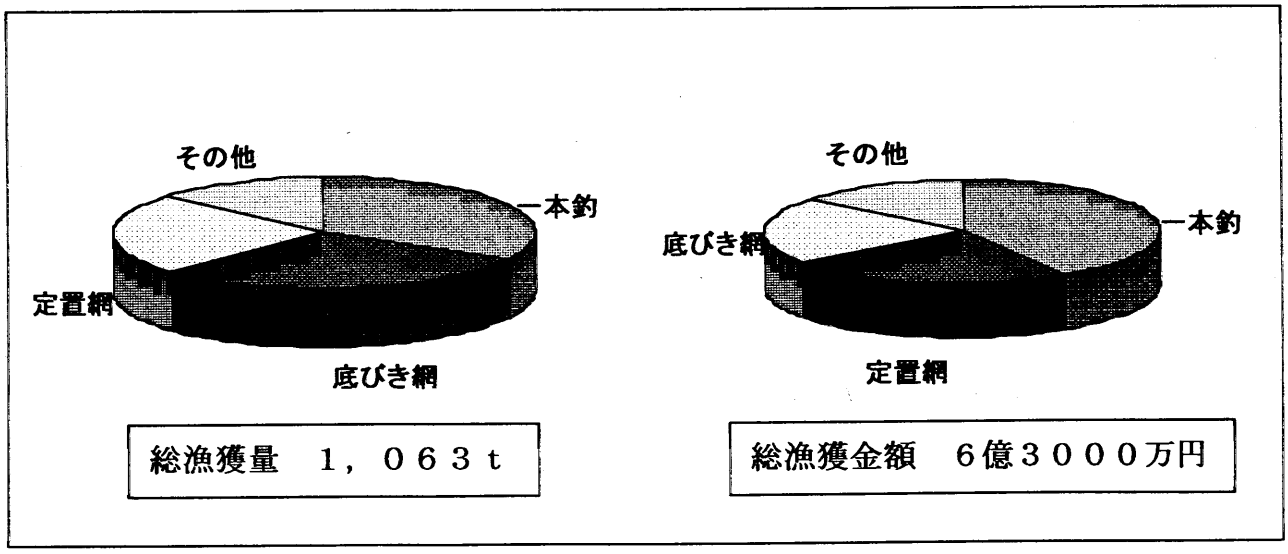


図２　大社町漁協漁獲量・漁獲金額（Ｈ１１）

月		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
操業形態	従来	タイ釣			採貝藻			ソデイカ、ヨコワ釣		プリ釣			
	今年度から		メバル、イシナギ釣										

表1　年間の操業スケジュール

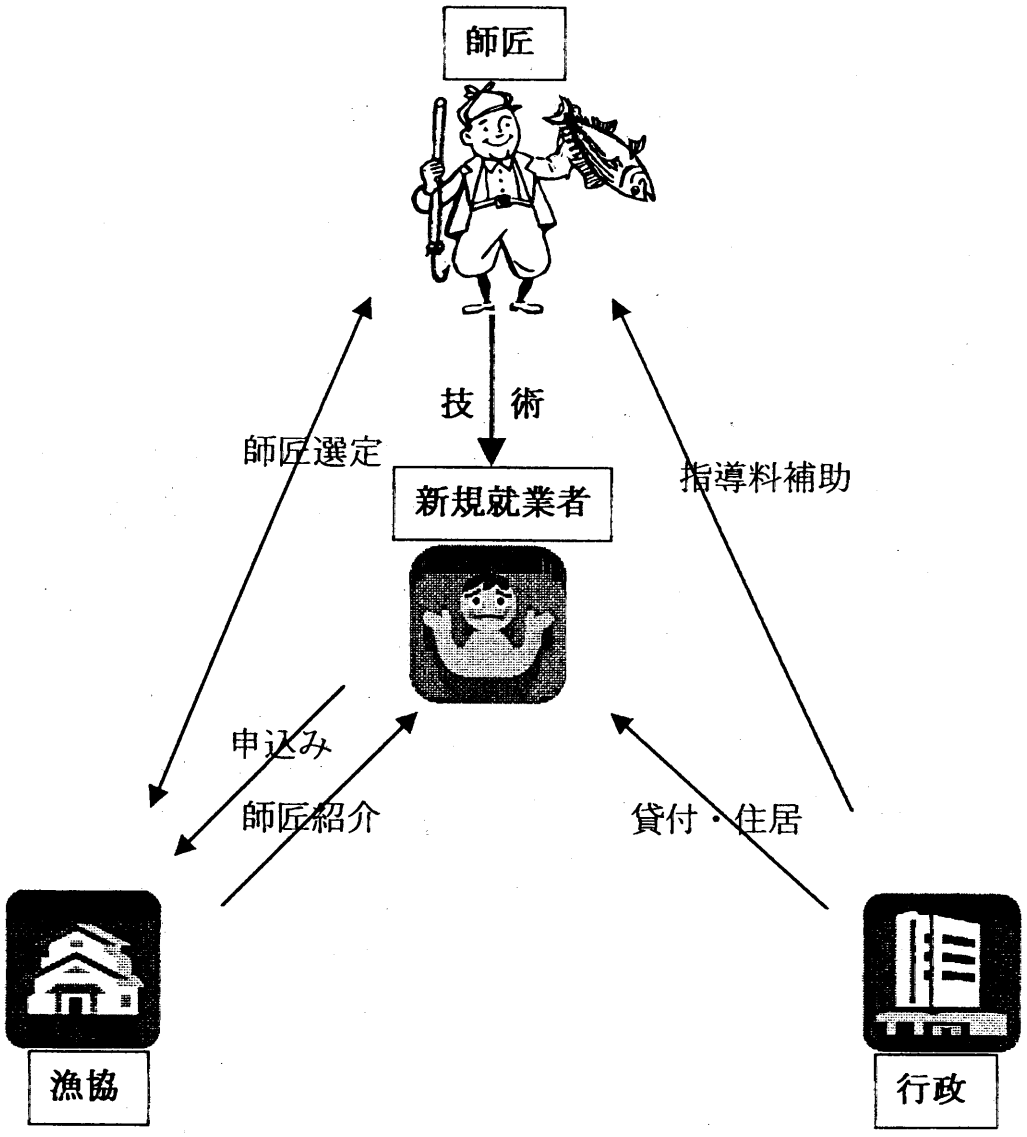


図3　サポート体制

図４　生産者シール

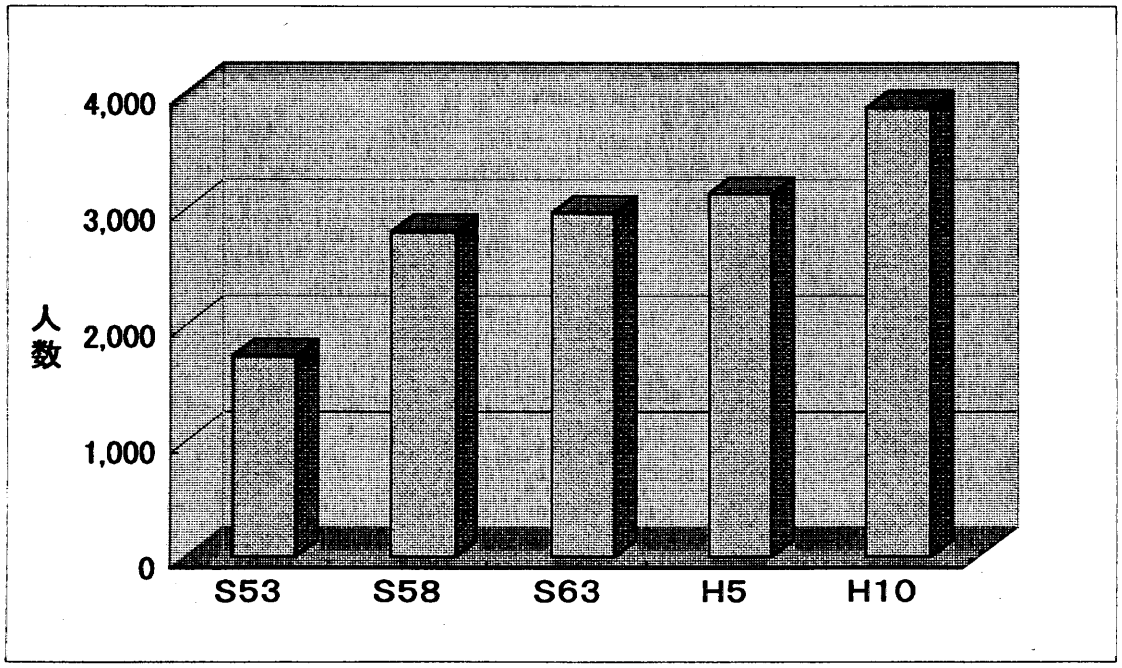
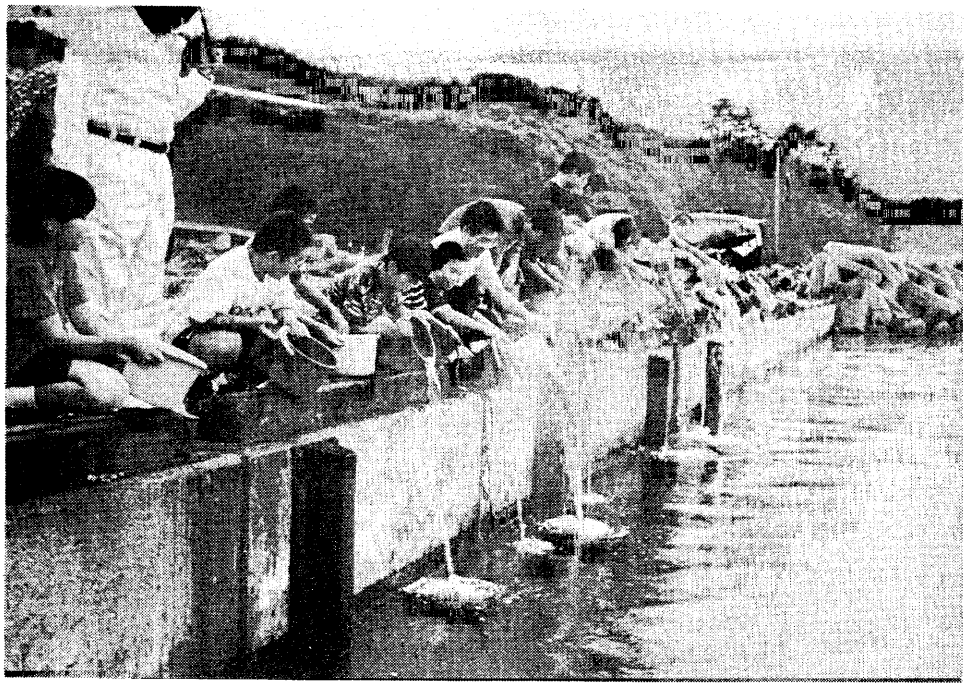


図５　全国における釣り人口の推移

漁業体験学校③



マダイ、ヒラメの放流

漁業体験学校①

漁業体験学校②